
とある仲良しの日常

Dom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある仲良しの日常

【Nコード】

N1346BA

【作者名】

Dom

【あらすじ】

学園都市。そこに仲の良い5人がいた。

上条当麻。

一方通行。

食蜂操祈。

土御門元春。

周大和。

そんな5人のほのぼのとした日常を書いていこうと思います。

ほのぼをメインとしていこうと思います。
オリキャラは1人入れました。

登場人物（前書き）

仲良し5人の日常を書いていこうと思います。

初心者ですので、不明瞭な点が出てくるかもしれません。

もし、そうなった場合アドバイスなどしていただけると助かります。

登場人物

登場人物

1・上条 当麻かみじょうとうま

とある高校に通っている高校1年生。右腕には【異能】の力なら大小問わず打ち消してしまう「幻想殺し」イマジンブレイカーを持っている。幻想殺しは彼の中に秘められているもう1つの力を抑えるためであつて、他人の力を打ち消すのはついでのようなものである。幻想殺しの力を解除している間のみ今まで打ち消してきた他人の力を自分のものとして扱うことができる。解除したときのデメリットは異常なまでにお腹が減ってしまうことである。なので彼は極力その力を使わないため、体術を小さい頃から学んでいた。よつて今ではスキルアウト10人に囲まれても幻想殺しと自分が極めた体術で敵を全員気絶させ、その場を突破することができるようになっている

2・周 大和しゅうだい

オリキヤラ。彼の能力は「座標補足」ポイントキャッチレベル5の第6位。座標を求めて、その座標に【何か】をするのが彼の能力。何か…というのは曖昧だが補足した座標に攻撃をする場合「炎」を使つたり「電撃」を使つたりどんな方法でも攻撃することが可能である。

相手の攻撃を曲げることも可能である（体の動きは不可能）なので一方通行より強いが、上条には勝てない。

ただ、能力測定るときは彼の能力で一番使いやすい「空間移動」の能力で受けているため、

表向きではレベル4の空間移動能力者テレポーターになっている。

彼がレベル5と知っているのは統括理事会と上条達だけである

3 . 一方通行
アクセラレータ

いいやつ。めちゃくちゃいいやつ。

ベクトル操作を持つ学園都市最強の男。だが上条と周には勝てない。上条の手を借りて、一人も妹達を殺さずに実験を中止に追いやった。

4 . 食蜂 操祈
しょくほうみさき

一度、能力が暴走していたときに上条に助けられた。結果、惚れてしまった。

いつもいつも上条にひつついている。上条の周りの奴らは呆れ気味でその風景を見ている。
むやみに能力を使わないいい子…のはず。

5 . 土御門 元春
つちのみかたげんはる

魔術師。レベル0の「肉体再生」を持つ男。いつも上条達に振り回されている。

彼らのいつメンのうちの一人

登場人物（後書き）

自作から始めます！

舞台は学園都市

夏休みも終わりに近づいた5人の日常です！

8月25日(木) (前書き)

ついに始まります！

よろしくお願ひします

8月25日(木)

8月25日

学園都市とある病院の一室

そこには白髪で赤色の瞳をもつ少年が親友が訪れてくるのを待っていた…

8

コンコン

??「アクセラレータ一方通行…入ってもいいか？」

一方通行「あア…構わねエ」

??「元気してたかよ親友」

声のした方にはワックスで固めたであろうツンツン頭が特徴的な少

年が立っていた。

一方通行「体はお前のせいで傷だらけだが、精神的には問題ねエ…
アリガトな当麻」

上条「いいってあんな実験潰したほうがいいに決まってる」

あんな実験とは、一方通行が妹達と呼ばれるクローンを2万回殺す
ことで絶対能力者^{レベル}に成れる…という内容の実験である。

一方通行「まア…潰すために結構痛い思いしたが、それであいつら
が死なねエんだったら問題ねエよ」

上条「あの時は手加減したらいけないと思ってさ…ん？」

廊下を全力で走っているであろう音が聞こえて、上条と一方通行は
話を止めた。

ドアが乱暴に開けられ、病室に陽気な声が聞こえてきた。

??「上や〜ん！元気してたぜよ〜？」

??「おいおい土御門…それは一方通行に言う言葉じゃねーのか？」

土御門「いやーつついっくせで上やんに言ってしまったぜよ」

上条「土御門に大和！お前らもお見舞いか？」

病室に入ってきたのは土御門元春と、周大和しゅうやまとの二人であった。

大和「ま、そんなところかな？」

土御門「まさかほんとに実験を中止に持っていくとはにやー…ほんとに上やんはすごいぜよ」

大和「そのせいで一方通行はボロボロだけだな」ニヤニヤ

一方通行「てめエ…何笑ってやがる！」

大和「おいおい…ここは病院だぜ？暴れんなよ一方通行」

一方通行「暴れる気はねエよ」

上条「それよりさ、いつ退院するんだ？」

一方通行「あと2日ぐらいかア？カエル顔はそう言ってた気がするがなア」

そこへ冥土ヘブンキャンセラー返しと呼ばれる医者が入ってくる

冥土「だれがカエルだつて？」

大和「先生！」

冥土「彼、明日には退院できそうだね」

上条「お！退院したらみんなでパーっと飯でも食いにいくか！」

土大「……いいね（エ）賛成だ（にゃー）」「」「」

そうこうしている間に完全下校時間が近づいてきた。

上条「んじゃあ俺たちは帰るな」

一方通行「あアまたな」

大和「バイビ〜一方通行」

土御門「しっかり寝るぜよ〜？」

一方通行「ふン…うるせエ」

上条「予定はメールで教えるからな〜」

一方通行「ほんとに当麻には世話になりっぱなしだよなア」

冥土「彼はほんとに面白いことを考えるね」

冥土「君を全力で叩き潰すことによって【上】に「一方通行は実はレベル0にも負けるほど弱いんだ」って思わせる。それで実験を止める…ね」

一方通行「まア、いつ戦ってもあいつには勝てねエからな」

少しの間病室は静かになった。

突然冥土返しはこんなことを言い始めた。

冥土「いくらクローンと言っても彼女たちは「人間」だからね？だから死んでいいなんて思っではいけないんだよ」

一方通行「一人も殺す気はねエし、一人も死んでねエ…それもあいつが頑張ったからだろうなア」

冥土「もし…もしもだよ？再び妹達がつくられ始めたら…君はどうするつもりだい？」

一方通行「答えはひとつだア…研究所を塵も残さず消す。ンでもって妹達を保護してこの病院に連れ帰る。」

冥土「二つ答えを言ってるような気がするんだけどね」

そう言つて冥土返しは病室から出るためドアに手をかける

冥土「それとね一方通行」

一方通行「なんだ？」

冥土「病院はホテルじゃないからね？」

そう言い残して冥土返しは病室から出ていった。
彼が病室から出た直後一方通行は眠りについた……

帰り道

土御門「予想以上に元気でなによりぜよ」

上条「だな」

大和「その通りだ……ぜ……？」

土御門「どうしたんだにゃー？」

大和「直感だけだよ…そこを右に曲がったら操祈が居そうなんだけど」

土御門「ははは、そんなわく「当麻さん！」…あつたぜよ」

声が出た方向から、常盤台中学の制服を身に付けた美少女が3人の元へ走ってくる

上条「おう！今日も元気だな操祈！」

食蜂「当麻さんこそ元気で何よりです」

食蜂 操祈（ほくへい）：彼女は以前能力が暴走して人への読心術（しんしんじゆつ）がフルでオープンになってしまい、ずっと他人の心の声が聞こえ続けて苦しんでいたところを上条の幻想殺しによって助けられている。

それ以来上条に惚れてしまい、ずっと一緒にいるのである。

ちなみに、惚れた時から毎日のように、上条に告白しているが毎回彼に振られている。

それでも諦めることなくずっと一緒にいるのである。

大和「操祈は一方通行の見舞い行ってあげたか？」

食蜂「え…一方通行さん入院してたんですか!？」

彼らは一方通行の入院した理由を全て話した。

食蜂「そうだったんですか…」

大和「ま、こいつが一方通行をブン殴って実験を終わらせたんだけどな」

土御門「上やんのパンチは痛いぜよ…一方通行よく耐えれたにやー…」

上条「それで、明日一方通行が退院するからどこかでパーッと祝ってやるのかな？なんて考えてんだけど…操祈はどうする?」

食蜂「行きます!みんなで祝ってあげましょう!もちろん私の席は当麻さんの隣ですよ!異論は認めません!」キラキラ

土御門「目が輝いてるぜよ…」

上条「んじゃ、後で皆にメールで予定を教えるな」

食土大「了解!!」

上条「それじゃ、また後でな」

4人が自分の住んでいる寮へ帰っていく。
食蜂だけ寮が違うのだが…

食蜂「なぜだアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」
グオオオオオオオオオオ

常盤台生徒「!?!」
ビクッ

家

上条当麻は悩んでいた。

上条「明日退院だろ？だったら明後日のほうがいいんじゃないか？
いや……でも明日でもいいしなあ……」

10分後

上条「明後日でもいいだろ……」ハア

TO土御門

TO大和

TO操祈

TO一方通行

本文

よう

退院祝いのことなんだけど

明後日にしようと思う。

18時30分に俺たちの寮の前で

集合でいいか？

それと、ミサキチは寮の門限とか

大丈夫なのか？

1分後

P i r r r r

上条「いや、早すぎだろ」パカッ

From 操祈

門限は大丈夫です！

それと、当麻さんが決めたことに
反論するつもりはありません！

P・S 必ず私の隣に座って下さいね？

上条「いやいやどんだけ必死なんだよ…可愛い奴め」ニヤニヤ

その後、土御門、一方通行、大和の順番でメールが届いた。
彼らも上条が立てた案に反対は無いそうだ。

そして、もっと詳しく予定を立てたあと全員にメールで内容をもつ
1度送った。

上条「うっし！風呂に入って、寝るとすっかね」

8月25日(木) (後書き)

完璧なほのぼの空間をつくるのって苦労しますね。

食蜂の話し方がよくわからないので自己流でいきます

8月26日(金) (前書き)

前回、登場キャラクターは一通り全員出しました。
これ以上増えたら書くのが難しくなりますかね？

今日は周をメインにやっていきます

8月26日(金)

8月26日

周大和は11時まで寝てしまっていた。

大和「ん…？11時か…寝すぎたな」

身支度を済ませると昼食を食べに外へ出かける準備をしていた。
ちなみに一方通行が退院するのは夕方。

上条は補修。

土御門は…義妹と遊んでると思う。

ミサキチは…別にいいや

大和「一人かよ…」

ぶつぶつ独り言を言いながら寮を出て、レストランへ向かった…

大和「おいおい…ありゃランチってやつか？ショーがねえ助けてや
つか」

路地裏を見る彼の視線の先には10人ぐらいの不良達に囲まれてピンク色の髪の毛でツインテールの常盤台の女の子がビルの壁に押し付けられている瞬間が映っていた。

大和「うっし！いつちよやりますか！」 シュンッ

不良A「うわッ！なんだこいつ！？」

不良B「テレポーターか…？」

大和「はいはい、そこまでそこまで。その子を放してやりな」

不良C「うっせーなあ…部外者はだまつてる」

大和「日本語がわかんねーのか？話せって言うてんだよ！」

不良B「ああ！？誰に向かって口聞いてやがる！てめえらやっちまえ！」

黒子「（んなあ！？この殿方…いきなり名前で呼んでくるんです！？）」「アセアセ」

大和「おい…黒子さん？」

黒子「ゴホン…で、ではお昼ご飯でよろしいのですね？」

大和「できればね…無理ならクレープとかで済ますけど…」

黒子「結局食べ物なんですのね…こちらもお話したいことがあるのでお昼ご飯と一緒に食べに行きましょう。」

大和は、白井黒子と名乗る常盤台の学生と共に昼食を食べることになった。

まさかこの後自分に弟子入りしたいと名乗ってくる人がいることなど予想もしていなかった。

レストランについた二人は改めて自己紹介をしていた。

黒子「やはり周さんは空間移動能力者でしたね」

大和「あああ………そうだよ。あと、俺のことは大和でいい。」

黒子「了解ですの。」

大和「それとさ黒子ちゃん…なんでさつきは能力を使っていなかったの？」

黒子「あの不良たちに囲まれてた学生を逃がして、彼らを捕まえようとしたんです。そしたら不意を突かれて頭を攻撃されて…」

大和「その衝撃で空間移動が出来なくなった…と…？」

黒子「恥ずかしながら……そうですの」

大和「空間移動は精密な計算が必要だからな……頭攻撃されちゃ使えなくなるのもおかしくないしね」

黒子「わたくしの不注意で大和さんまで巻き込んでしまって……申し訳ないですの」

二人の間に謎の沈黙が現れる…
先に口を開いたのは白井の方だった。

黒子「失礼ですが、大和さんは能力の限界値はいくらですか？」

大和「えーつとね…（やつべーよ限界値？覚えてーよんなもん…テ
キトーに答えるか）」

彼は空間移動の能力検査を受けているが、空間移動が自分の能力で
ないため限界値など覚えていないのだ

大和「たしか…距離は1kmで、最大で5tぐらいなら飛ばせるな
（あれ？これじゃあ霧ヶ丘の座標移動よりすごくないか？）」

黒子「す…凄すぎですの。わたくしなんか80mしか飛ばせない上、
130kgが限界ですのに…」

大和「そ…そう落ち込むなって！」アセアセ

黒子「申し訳ありませんの…」

そつこつ言ってる間に頼んだ品が届いた。

大和「いったただっきまーっす！」

黒子「いただきますの〜」

無事、昼食も食べ終わり二人は外へ出ていた。
そこで白井黒子はあるお願いを周にするのであった。

黒子「や…大和さん！わたくしを弟子にしてくださいだけないでしょうか!？」

大和「いきなりどうしたの!？」

黒子「いえ…大和さんに教えて頂いたらもつと強くなれると思いますして…」

大和「……………強くなりたい理由を教えてくださいませんか？」

黒子「わたくし、風紀委員に所属しています。そこにいる私の相棒は情報処理においては右に出るものは居ないほどすごいのですが、戦闘能力では小学生にも負けてしまうほど弱いんです。」

大和「で…その子を守るために強くなりたいと？」

黒子「ええ…その子を…初春を…守りたいんですの！」

大和「守りたい…ね…いいぜ！弟子つてのにしてあげよう」「ニカッ

黒子「あ…ありがとうございますの！」

そして二人は携帯番号とメールアドレスを交換した。

白井黒子は風紀委員の仕事が入ったとかで、急いで支部へ向かっていった。

そして周大和に弟子が出来た。

大和「つか何教えればいいわけ!？」アセアセ

大和「一方通行に模擬戦でもやらせるか」ニヤニヤ

大和「アイツ相手じゃ攻撃当たらねーしなあ…上条が最適かな?」

いろいろなことを考えながら歩いていく周。
そんな彼の目にある風景が飛び込んできた。

大和「今日の俺は不幸なのかな?」

大和「銀行のシャッターが降りている…。」

つまり銀行強盗でも起きたのであろう。
彼はすぐに行動を始めた。

大和「つつてもどーっすかなー…とりあえず裏口でも探してそこから入るか…？」

だが、彼はそこで考えを変えた。

大和「俺が裏に回ってる間に中の人が怪我したらどうするんだ…シッター壊すか…」

空間移動して建物の中に入る案もあったが、飛んだところに人がいたら大変なことになるのでシッターを壊すことにしたのである。

大和「計算終了……溶けるッ！」

大和の手から灼熱の炎が生み出される
炎はシッターを溶かし、穴を作る

強盗A「な、誰だてめえ！」

強盗は2人。片方が体から電撃を出しているので片方は発電能力者であることがわかる。

強盗B「感電しなくなったらそこを動くな！」

大和「動くなつて言われると動きたくなくなるんだよね〜」「ニヤニヤ

大和が強盗に近づこうとした瞬間電撃が飛んできた。

大和「じゃましないでくれない？」

大和が右腕を振ると電撃が大和の右後ろへ方向転換し、飛んでいった。

強盗B「な…曲げただと！？俺はレベル3だぞ！？何をした！！」

大和「何をしたって言われると…曲げました」キツパリ

強盗A「ふざけやがって…燃えて消える！！」

強盗の手のひらから炎の塊が飛んでくる

大和「だ〜か〜ら〜当たらないって…！」

大和が右腕を炎に向けると、炎はまるで動きが止まったかのように空中で静止した。

強盗A「何！？何をしたあ！！」

大和「お前ら二人の計算式を逆算して、攻撃対象の座標を俺の任意の場所に移動させてもらったただけですぜ」

強盗B「は…はあ！？そんなこと出来るわけねーだろ！」

大和「うっせーなー…もうそろそろ風紀委員が来る。それまで寝てもらっせ！」ダッ

大和は強盗2人にパンチを浴びさせ気絶させた。

大和「上条直伝のパンチだ…30分ぐらいで目は覚めるとおもっせ？」

大和はすぐさま強盗2人を拘束して、風紀委員の到着を待っていた。そんな彼に先ほど弟子入りした少女の声が届く。

黒子「師匠！こんなところで何をなさってるんですの？」

大和「ん？黒子か…そっか、ここはお前の支部の管轄なんだな」

黒子「はい…もしかしてあの2人が強盗ですか？」

大和は強盗事件で起きたこと全てを話した…。

黒子「はあ…そうでしたの…」

大和「まあそんなとこかな？俺、用事あるから帰っていいか？」

黒子「ええ…構いませんの。あと、今度時間が出来たら風紀委員177支部に来ていただけませんか？」

大和「別にいいけど…俺捕まるようなことしたっけ？」

黒子「いえ、わたくしに師匠が出来たと仲間に伝えると是非1度でいいから見てみたいと言っていますの…」

大和「そんなことか…別にいいけど、2学期始まってからでいいか？」

黒子「構いませんの！ではよろしくお願いしますわ」

白井は2学期に特訓を受けさせて欲しいと大和に頼むと銀行の中へ入っていった。

大和はそれを見届けるとある場所へ向かっていった。

コンコン

大和「はいるぞー」ガラガラ

一方通行「どうしたア…こんな昼間っから暇なのかア？」

大和「さっきまで壮大なスケジュールだったんだぜ？」

一方通行「何かあったのかア？」

大和「いやあ…銀行強盗を懲らしめてきた！」

一方通行「お前に当麻の不幸が移ったんじゃないの？」

大和「それはそれは…困りましたな」

彼らが話初めて二時間が経過したころ冥土返しが部屋に入ってきた。

冥土「もうそろそろ出ていっても大丈夫だね」

大和「うっし！じゃあ荷物運んでやるよ」

一方通行「ん」

二人は荷物を抱え部屋から出ていった。

大和「荷物少なくなかね？」

一方通行「もう寮に送ったからなあ……」

大和「そっか！準備がいいなお前は……」

日も暮れかかっている学園都市の道を二人のレベル5が歩いていく。

大和「明日、楽しみだな！」

一方通行「ああ」

8月26日(金) (後書き)

一方通行の話し方って案外打ち込むの疲れますね…

未だに食蜂の話し方を安定させるのが難しいんですよ

8月27日(土) (前書き)

前はちよつとだけバトルがおきました、無事終えることができませんでした。

8月27日(土)

8月27日

上条たちが住んでいる寮の玄関先に男が4人立っていた。

大和「今日は皆に合わせたい奴がいるんだ……」

上条「合わせたい人？」

大和「ああ……昨日路地裏で助けた子なんだけど、その子空間移動能力者だったのさ」

一方通行「へエ……ンでお前の能力見て、弟子にしてくださいとか言ってきたオチか？」

大和「大正解！さすが第一位の頭脳だ」

土御門「弟子…？弟子…？弟子…？にゃ…にゃー」

上条「土御門が壊れた！」

4人が遊んでいる時、弟子は現れた。

黒子「初めまして。常盤台の白井黒子と申しますの。よろしくお願
いしますの」

大和「えーつと左か」「んじゃまず俺から！」「…よろしく」

上条「俺は上条当麻！能力は…能力は…：無いつてことにしておい
てくれ」

土御門「俺は土御門元春。土御門って呼んでくれにゃーちなみに天
下のレベル0ですたい」

一方通行「一方通行。能力はベクトル操作。序列は第1位だ」

黒子「第1位様ですの！？」「ビックリ」

一方通行「序列で呼ぶんじゃないぞ?」

黒子「わかりましたの。」

自己紹介も無事終わり、あとは彼女を待つだけになった。
そこへ一通のメールが届く

From 操祈

本文

当麻さん！申し訳ありません。
少し遅れそうなので先にお店に
行っておいて下さい。

P・S 隣の席は必ず開けておいて
くださいね！

黒子「この方は…ご彼女か誰かですか?」

上条「いや、そんなんじゃないんだ」

一方通行「早く行くぞオ」

レストランについた一同は席についた。

今回は中華風レストランなので机は円の形になっている。

上条「俺の右側は開けておいてくれ。後でめんどくさいことになるから」

大和「だな」ニヤニヤ

土御門「その通りですたい」ニヤニヤ

一方通行「眠みイ」

黒子「了解ですの」

料理を頼んで、しばらくすると操祈がレストランに駆け込んできた。

食蜂「当麻さん！皆さん！遅れてすみません！…ん？常盤台の制服？」

上条「まだ飯は来てないから問題ないぜー」

黒子「な…な…なぜ心理掌握メンタルアウトがここに！？」

食蜂「あら…私はここに来てはいけないのかしら？」

黒子「い…いえ…決してそのようなことは…」

食蜂「そんなに怯えないでちょうだい」クスクス

大和「そっか操祈は常盤台の2大エースだもんな」

食蜂「えーつとあなたの名前は…」チラッ

土御門「なんだにゃー？」

食蜂「白井黒子さんね？私は食蜂操祈。操祈でいいわ」

黒子「は…はい！よろしくお願いしますの」

握手をする2人。その傍らで白髪の男と茶髪の男が静かに話していた。

大和「今、土御門覗かれたな」ヒソヒソ

一方通行「ああ…确实だなア…」ヒソヒソ

上条「こら！操祈！勝手に人の頭覗いちゃダメだろ！」プンプン

食蜂「あ…ご…ごめんなさい！嫌いにならないで！」

上条「今回は土御門だから別にいいけどほかの人だったら許さないからな！」

食蜂「ごめんなさい…」ウルウル

中華料理店内

上条「この料理美味しい！」モグモグ

土御門「中華なんて久しぶりだにゃー」モグモグ

大和「この餃子上手い！」ギョオンギョオン

食蜂「いやいや、大和さん食べる音おかしくないですか？」パクパク

大和「ガン〇ムだ！」モグモグ

一方通行「最後の1個は俺がもら」させないぜよ!」「おい!」

黒子「(本当に仲が良いのですね)」パクパク

上条一行は夕食を食べ終え外に出ていた。

上条の腕に食蜂が抱きついてるのはいつものことである。

上条「んじゃーこちらへんでお開きとしますか!」

大和「そうだな…じゃあ皆また今度な」ノシ

食蜂「当麻さん!また呼んでくださいね!」ノシ

6人は男女に別れて自分たちの寮へ向かって歩きだしていく。
白井黒子は思い切って食蜂にこんなことを聞いてみた。

黒子「操祈さんは上条さんのことを異常なまでに慕っているようですが、過去に何かあったんですの?」

食蜂「ええ…過去に1度能力が暴走してね、その時に当麻さんが助けてくださったの」

黒子「暴走しているレベル5を止めた??」ビツクリ

食蜂「あら?当麻さんの力を知らないの?」

黒子「力…?（そういえば自己紹介のとき能力を言おうとした時躊躇っていたような気がしますの）」

『能力は…能力は……無いってことにしておいてくれ』

黒子「（あの反応は一体…）」

食蜂「知らないんだったらいいの!」アセアセ

黒子「は…はあ…」

気がつくくと白井の寮の目の前に着いていた
白井は食蜂に頭を下げると、寮の中へ入っていった。

食蜂「（他人に力を教えると怒られますからね…）」

食蜂「（私でも当麻さんの全力を知りませんし、あの力は一体…）」

そうこうしている間に自分の寮へ着いていた。

食蜂「ただいま戻ってまいりましたわ」ガチャ

常盤台生徒「」「女王！おかえりなさいませ」「」

彼女たちと別れたあと、4人はこんな話をしていた。

大和「つかさ、もうそろそろ夏休みも終わりだぜ？宿題やったか！？」

上条「明日で全部終わるぜ！ちゃんとやっててよかったあ〜」

土御門「何い！？上やん宿題やってたのかにやー！？」

上条「見たいんだったら帰りに俺の部屋に来いよな」

土御門「残念ですたい。もう終わってるんだにやー！！」

一方通行「宿題だア？そんな物もらってねエっつーの「シレッ

大和「うわぁ…セコイ…1位だからか！？俺だってレベル5だっつーの！」

一方通行「てめエが能力偽装してっからそオなるンだろオが」

大和「その通りでございます」orz

夏休み終了間際によく話される宿題の進捗の話をしていると、彼らは自分たちの寮に着いた。

そして、おやすみの挨拶をすると各自別々の部屋に帰っていった。

2時間後…とある路地裏の出来事

??「でもさー結局水着って人に見せつけるのが目的な訳だから、誰もいないプライベートプールじゃ高いやつ買った意味がないっていうか…」

??「でも市民プールや海水浴場は混んでて泳ぐスペースが超ありませんが」

??「んーたしかにそれもあるのよねー… はどう思う?」

??「浮いて漂うスペースがあればどっちでもいいよ?」

??「はいお仕事中にたべられない。新しい以来が来たわよ」

??「不明瞭な依頼だけど、ギョラは悪くないしやることは単純かな」

??「やることって?」

「? ?」1週間以内に来るであろう侵略者からの施設防衛戦!

8月27日(土) (後書き)

また、戦闘が始まるのですか…

また、戦闘が始まるのですね…

8月30日(火) (前書き)

あの3人が登場です！

8月30日(火)

午後4時

とある病院の前に上条当麻、食蜂操祈、一方通行、土御門元春、周大和の5人はいた。

上条「ほんとにいいのかよ一方通行…彼女たちにこいつらを合わせ
て」

一方通行「構わねエ…アイツらも会いたって言ってたしなア」

大和「確か…第3位のクローンだっけ？」

土御門「でもどうしていきなり会いたって言ってきたんだにゃー
？」

食蜂「おそらくですが、友達が…欲しいとかではないでしょうか？」

一方通行「精神操作系最強の操祈が言ってんだ…間違いはねエだろ」

大和「黒子が来れなくてほんとによかったぜ…」

食蜂「黒子は御坂さんのことを異常なまでに慕ってますからね」「ク
スクス

一方通行「お前が言うなよオ…」ハア

食蜂「なあ…あ、あの子は相手が女の子ですが…私はッ!」「アセアセ

土御門「レズっ子もいける!ってやつがうちのクラスにいるぜよ」

大和「青ピか…あいつは意味がわかんねーしな」

そんな話をしていると彼女たちがいる病室にたどり着いた。

上条「おーいみんなで遊びに来たぞー」

<入っても大丈夫ですとミサカは即答します

一方通行「入るぞ」ガラガラ

一同「……失礼しまーす」「……」

上条「おう！久しぶりだな…元気にしてたか？」

00001「体の傷は癒えましたとミサカは現状報告します」

一方通行「そりゃよかったなア」

00002「そこで貴方がたに少し相談があるのですとミサカはあなたの顔をまつすぐに見つめながら心中を吐露します。」

上条「俺たちに？」

00001「はい。それとお話をするために少し外に出ましよう
とミサカは貴方がたの腕を引っ張ります」

00001号に引っ張られ部屋の外に出ていく上条と一方通行。
そのころ部屋では…

土御門「いやーほんととそっくりだにゃー」

大和「俺はオリジナルを見たことねーからわかんねーけどな」

食蜂「いや、本当にそっくりですよ？」

大和「ん？当麻達いねーじゃねーか…どこいったんだ？」

00002「それなら問題ありませんとミサカは横槍をいれます」

00003「いま00001号が彼らにお願いをしている最中ですよ
とミサカは簡潔に答えます」

土御門「何で00001号ちゃんをお願いしてるってわかるんだに
やー？」

00002「ミサカ達は発電能力を使って脳波をリンクさせること
が出来るのですとミサカはあなたにヒントを出します」

食蜂「それでネットワークでも作ってるの？」

00003「はい、その通りですとミサカは答えを述べます」

大和「ほお…そりゃ便利だな」

土御門「今度かみやんと繋いで、テストをカンニングさせてみたいぜよ」

00002「それは出来ませんとミサカは即答します」

土御門「冗談だにゃー」

00003「!!!…00001号の相談が終わったようですとミサカは皆さんにお伝えします」

00003号がしゃべり終わったと同時に上条と一方通行が部屋に入ってきた。

その後ろで00001号がとても幸せそうな顔をしていた。

一方通行「俺は店の方をどうにかしてくる。あとは頼んだぞ」

そう言い残して一方通行は部屋から再び出ていった。その行動に疑問を持った彼らが質問してきた。

大和「店ってどーゆーことだ？」

土御門「俺も気になるにゃー」

上条は00001号と話したこと全て話した

食蜂「つまり、外を見てみたいと…」

土御門「まあ生まれた時からずっと施設の中にいたらそう思つのが普通だにゃー」

大和「でもよ、3人も超電磁砲がいたら店員びっくりするぜ？」

上条「大丈夫だ、店出るとき操祈に店員全員の頭の中から妹達の記憶を消してもらつから」

大和「さすがレベル5…」

食蜂「いくらで借りる気なんでしょう？ 私たちも少しは出したほうがよさそうではありませんか？」

土御門「1位だから問題ないにゃー」

大和「でも移動はどうするんだよ？タクシー借りる訳にはいかねーしな……」

上条「え？俺と、大和。二人で飛ばせばいいじゃねーか」

大和「一番聞きたくない答えだぜ……」

P.i.r.r.r.r.r

From一方通行

本文

店ごと借りることに成功した。
座標を転送するからすぐに飛んで来い
その場所には何も物は置いてないから
安心しやがれ

大和「んじゃ上条はミサカ達を頼む」シュンッ

上条「それじゃ行くぞ?」

00001、2、3「」よろしくお願いしますとミサカは……「」
シュンッ

オリヤ・ポドリーダ店内

大和「とーちやく！」 シュンッ

土御門「スペイン料理のお店らしいぜよ」

食蜂「なんで当麻さんと一緒に飛ばしてくれなかったんですか！」
ウルウル

上条「操祈…泣くなって、俺の隣座っていいから…」 ハア

食蜂「ありがとうございます」 ニッコ

00001、2、3「これがレストランですかとミサカは感動
します」「」

大和「驚きのシンクロ率だなあ…」

一方通行「お伊てめエらこっちだ」

一方通行が呼んでいる方へ7人は向かった。
そこには10人ぐらいが入ることのできる大きめの部屋があった

一方通行「料理はもう頼んであるから待つとけば届くぜエ」

上条「さすが一方通行！対応が早いな」

大和「やっぱりスペインに関する料理が出るのか？」

土御門「スペイン料理を出さなかったら、スペイン料理店を名乗る資格なしぜよ」

上条「でも一方通行が第7学区の店を選んでくれて助かったな」

大和「たしかにな…お嬢2人の寮や俺たちの寮、カエル病院があるからな」

土御門「遠くまで飛ばなくていいからテレポ屋さんにも最適だにや
」

上大「俺たちはテレポーターじゃねーよ!!」

食蜂「皆様！お食事が来ましたよ」

一同「「「「「美味そうだな（ア）とミサカは…」」」」」

土御門「それでは！皆さん！いただき「いったただっきまー！す！…にゃー……」

一方通行「まア…ドンマイだ」モグモグ

土御門「」

上条「どうだ？初めて食べるレストランの料理は」モグモグ

00001「すごくおいしいです！」パクパク

食蜂「それはよかったわね」パクパク

大和「すべ…スペイン料理つてのも美味しいな」ギョオンギョオン
ギョオン

00003「周さん？食べる音が…」パクパク

食蜂「気にしちゃダメよ？彼はあれがデフォなんだからね」パクパク

大和「デフォじゃねーよ！」モグモグ

上条「ま、ミサカ達も喜んでくれて何よりってとこだな」

大和「他にやりたいこととかないか？」

食蜂「レベル5が3人いるのよお？なんでもできるわ」

00002「あの…ではひとつだけッ！」

上条「ん？なんだ？？」

00003「お…お姉様に会いたいですとミサカは…」

一方通行「オリジナルにかア？」

00001「はい…無理でしょうかとミサカは首をかしげます」

上条「でもこの中で御坂美琴に面識あんのは操祈だけだろ？」

大和「あとうちの弟子だけだな」

一方通行「てめエンとこの弟子は論外だコイツら見ただけでぶっ倒れちまう」

食蜂「私もちよつと無理ですね…寮が違いますし…」

00002「ならいいんです！無理を言って申し訳ありませんと…サカは謝罪します」

大和「いや、俺ならいけるな」

上条「お前が！？面識ないのか！？」

大和「こんど風紀委員の177支部に顔ださねーといけねーんだ…その時に超電磁砲にも来てもらっとならば、きっかけはつかめるかもしれねえ」

一方通行「それしかねえな…頼んだぞ」

大和「任せろって！」

00001「なぜ彼らは初対面のミサカ達のためにあそこまでしてくれるのでしょうかとミサカは戸惑いをあらわにします」

食蜂「それはね、貴方たちをひとりの人間として見ているからよ…あの人たちがどうやって実験を止めたかなんて知ってるんでしょ？」

00003「はい。カエル先生に全てを教えていただきましたとミサカは答えます」

00002「それでもミサカたちはボタンひとつで簡単に製造できる物であって…」

食蜂「それでも貴方たちは生きていない…それだけで立派な人間よ」

00001「ミサカたちは人間として生きてもいいのでしょうか…？」

00003「お姉様に」ご迷惑をおかけしてしまうのでは…？」

食蜂「そこは大和さんがどうにかしてくれるわ…あの人たちを信じましょう」

食蜂達が話している時、上条は一方通行に呼ばれて店の外へ出ていた。

上条「いったいどうしたってんだよ？」

一方通行「黙ってきけよ？…妹達が1体だけだが再び製造されているらしいんだ」

上条「!？」

一方通行「ンで、俺はア明日までに研究所の場所を掴んでおく。だから明日は予定を開けておいてくれエ」

上条「わかった…でも特攻は夜なんだろ？」

一方通行「あア…すまないな当麻」

上条「いって！別に気にすんなよ困ってたらお互い様だろ？」

一方通行「フツ…ありがとなア」

そうして二人は店の中へ入っていった。

大和「食った食ったー」ゲフウ

土御門「きたないにゃー」

上条「んじゃ…今日はお開きだな！」

大和「じゃあこの子達は俺が送っていくな！」

上条「悪いな…よろしく頼む」

00001、2、3「」「」よろしくお願いしますとミサカは…」「」

大和「シュウ・ヤマト！行きます！！」シュンッ

上条「あいつは一体何がしたかったんだ？」ハテ？

土御門「やっぱりガンダム大好きなんだにゃー」

食蜂「それでは私たちも帰りましょう」

一方通行「ああ…そうだな」

8月30日(火) (後書き)

ガンのセリフを入れたいがために大和を犠牲にしました。

こういった食事のシーンはほのぼのとしていいと思いませんか？

8月31日(水) (前書き)

さあ！今日は突入です！

8月31日(水)

学区路上

学園都市最強と学園都市最凶の男は2人揃って仲良く歩いていた

上条「つまり、その研究施設に打ち止めラストオーダーと呼ばれる妹達がいるんだな？」

一方通行「ああ…ハッキングで手に入れた情報が正しければな」

上条「でも、なんで1体だけ生み出すことにしたんだ？」

一方通行「わからねエ…ただクソツタレどものレポートによると、いつか使う時が来る」…って書いてあったけどなア」

上条「いつか…ね…」

一方通行は上条にハッキングで手に入れた情報全てを話していた道を曲がり再び進もうとしたその時…

大和「おいおい…俺を置いて行く気か？」

家に居るはずの周大和がそこにはいた

上条「な…なんで大和がここに!？」

大和「簡単に言うとストーキングかな？」ニヤニヤ

一方通行「チツ…なら今、俺たちが何をしようとしているのかも分かっただろ？」

大和「モチのロンだぜ」

上条「お前も来る気か？」

大和「あんなこと聞いて黙って帰れっかよ!」

一方通行「ほかの3人はいねェんだろっな？」

大和「ああ…あいつらは呼んでない」

上条「土御門はともかく、女の子をこんな殺伐とした場所に連れて来たくないからな」

一方通行「居なくて正解だぜエ」

そして一方通行は研究所が防衛として雇った暗部のグループ「アイテム」のことを2人に話した。

上条「つまり、その長髪の女には気をつけると？」

一方通行「ああ…そいつは第4位だ、まア俺たちが負けるわけないけどなア」「ニヤニヤ

大和「だな」ククク

上条「さあて行きますか！」

3人は全速力で研究所へ向かった。

上条「ここか…」

一方通行「あア……………ここ…ここ…だ……………」ゴホッゴホッ

大和「体力なさすぎだろ」ケラケラ

上条「じゃ最優先は打ち止めラストオーダーで！アイテムの奴らは殺すなよ？俺たちは一般人だからな？」

大和「わかってるって！」

一方通行「死ぬなよ……」

上条「互いにな」

研究所 - 物資搬入口

大和「誰も居ないのか…？」

そう呟く大和の左側から人形が飛んできた

大和「なんだッ!？」

咄嗟によける大和。その直後人形が爆発した

??「あんたが侵入者であつてる訳？」

爆弾が飛んできた方向に金髪の高校生ぐらいの女の子が立っていた。

大和「おいおい…人形は遊ぶためのものだけ？爆発させちゃ可哀想
だろっがフレンダさんよお」「ニヤニヤ

フレンダ「結局五月蠅い訳よ…とっとと死んでくれたら楽なんだけ
ど！」

彼女が言葉を発し終わると大量の^{爆弾}人形が飛んできた

大和「!？」

研究所 - 培養基安置部屋

一方通行はいち早く培養基を見つけた

そこには超電磁砲を4歳前後若くした容姿の女の子が入っていた

一方通行「こいつが…打ち止めってやつなのか…？」

??「そのガキが誰だか知らねーけどさ、私たちはその護衛なんだよね」

一方通行「てめエは…第4位、麦野沈利だな」

麦野「ああ！？…てめえは第1位か…」

一方通行「あア…悪イがそこをどいてくんねエか？」

麦野「はあ！？そのガキを連れ出すってのかよ」ケラケラ

一方通行「あア…その通りだ」

麦野「連れ出してどうするってんだよ！！」

一方通行「そんなときはそんな時だ…今はコイツを助けるのが優先なん
でなア、てめエに構ってる暇はねエンだよ！」

麦野「第1位だからって一人でこの街の【闇】をどうにかできると
思っなよ!？」

一方通行「ふん…俺たちはなア…一人じゃねエンだよ」

麦野「うっせー…なんだよ!ここで消えてなくなりやがれ!第1
位!!!!!!」

彼女は右腕を一方通行の方向に伸ばした。

刹那

右腕から光の光線が飛び出し一方通行に向かって飛んでいった

一方通行「チッ!」

研究所内部・メインコンピューター室

上条「ここは…コンピュータールームか…?」

??「あなたが侵入者ってことで超間違いはありませんね?」

上条「えーっと…絹旗…最愛モアイだっけ?」

絹旗「最愛モアイじゃありません!最愛さいあいです!」

上条「んでアイテムの絹旗サンは俺たちの邪魔をしようとする？」

絹旗「ええ…超その通りですよ！」

彼女は能力を使って上条に殴りかかった

上条「あつぶねえ！」ヒヤヒヤ

よけると同時に右腕で彼女の肩に触れた

絹旗「反射神経は超良いそうですね」

上条「まあな、昔鍛えたから」

絹旗「ですが！これで終わりです！！」「ブンッ

絹旗は空素装甲オフエンスアーモを展開し上条に再び殴りかかった…

上条「…」「ニヤッ

絹旗「な…ぜ…なんで無傷なんですか!？」

上条は絹旗に鳩尾を殴られていた。だが傷一つ負わず、後方にも飛んでいなかった

上条「簡単なことだ…お前の室素装甲を借りたまでさ」

絹旗「はア!?!私を馬鹿にしてるんですか!？」

上条「馬鹿にはしてないさ…ただし、お前が俺に勝つことは100

%ないってことだけは断言できるね」

絹旗「こんなところで負ける訳にはいかねエンですよ！闇の人間は失敗したらそこで殺されちまうんです！私はこんなところで死にたく無いんですよ！」

上条「でも顔にはもう「戦いたくない」って書いてあるぜ？」

絹旗「!？」

上条「今ならお前を暗部から引つ張りだすことができる。しかもその後の命の保証もある」

絹旗「そんな…こと…超無理に決まっています…」

上条「いいや俺にはできる。表に戻りたいんなら俺の手に触れろ、戻りたくないんなら今すぐここから立ち去れ」

絹旗は少しの間考え、上条の手に触れた

その瞬間目の前の風景が代わり、目の前には逆さづりになった人物が映った

窓の無いビル

アレイ 「来ると思っていたよ…上条当麻」

上条 「ようアレイスター…久しぶりだな」

絹旗 「あ…アレイスター！？あ、あの統括理事長の！？」

アレイ 「ふふふ…その通りだ、私こそ学園都市統括理事長アレイスタークロウリーだ」

上条 「能力使ったせいで腹減ってきたんだけど」

アレイ 「要件はなんだい？」

上条 「華麗なスルーっぷりだな……アレイスターにお願いがあつてきたけど……どうせ知ってるんだろ？」

アレイ 「勿論だよ……君たちの戦闘は全て見ていた」

上条 「なら話早いな……アイテム全員を表に返してやってくれ」

アレイ 「ふむ……別に構わないが」

上条 「それと命の保証もな」

アレイ 「わかった………おい！」

側近 「上条様……こちらです」

アレイの側近は4枚の用紙を上条に渡した
その内容を見た上条は口元を緩ませ3枚の用紙を空間移動させた

上条「あ…それと絹旗を俺の妹として戸籍追加よろしく」

そう言い残した上条は絹旗を連れて研究所へ空間移動していった

研究所

大和「ふ…ふふふ…あっはっはっはっはっは！！！！あの野郎おもしろえことしやがるじゃねーか！！！！ほら見てみるよ！！フレンドさんよお」

大和は手にもっていた用紙をフレンドに渡す

フレンダ「!?!?!?!これは一体…何がおこってる訳よ?」

一方通行「ククク…こりやすげエな」

一方通行は足のベクトルを操作して麦野の目の前に移動した
あまりの速さに麦野は追いつけずいきなり目の前に現れた一方通行
に驚いていた

一方通行「第4位…これを見てもろ」

麦野「はあ!?!?!?!なんだよこれは!?!?!一体何がおこってるんだよ!?!?!」

一方通行「俺の仲間がアレイスターに交渉したンだろオよ」

麦野「私たちが…表に戻る…？」

一方通行「ふん…あとは自分たちでどうにかするんだな」

P i r r r r r

一方通行「当麻か…何なに…？クハッおもしれエことしやがンないケラケラ」

一方通行「おい第4位！絹旗とかいうガキはうちの仲間が保護したそつだ。あいつは別の場所に移動してるよオだからもうここにはいねエってよ」

一方通行「……………10分だ…10分後にこの研究所は俺が破壊する…それまでに逃げておけよ」

そう言つて一方通行は培養基から打ち止めを出して、そこからへんに落ちていた布切れを被せると研究所の外へ出ていった

大和「当麻はどうした？あいつも入院か？」

一方通行「元アイテムのガキに今の現状と、俺たちの周辺のことを教えているらしい」

大和「そっか…それにしてもさっきの高電離^{プラスマ}気体…だっけか？すごかったな」

一方通行「計算がちよっぴりダルかったけどなア…」

そこに冥土返しと上条兄妹が入ってきた

冥土「打ち止めは少しの間ここで調整だね…そのあとは一方通行、君が面倒見るんだよ？」

一方通行「はア！？俺かよ！！」

大和「いいんじゃないか？頑張れよ一方通行！」

冥土「決まりだね？僕は調整があるからもどるからね」

そう言い残して冥土返しは部屋から出ていった。

絹旗「いきなり暗部から抜け出しても、実感が超わかないです」

上条「ま、徐々に慣れていけばいいさ」

大和「そうそう、ゆっくり慣れていけよな…それと俺のことは大和
って呼んでくれ」

一方通行「俺は一方通行で構わねえ」

上条「俺のことは好きに呼んでくれ」

絹旗「は…はい、よろしくお願いしますね…大和さん、一方通行、
お兄ちゃん」

上条「お兄ちゃん！？そつそれは…」アセアセ

大和「頑張れよ！お兄ちゃん！」ケラケラ

一方通行「お兄ちゃん」ケラケラ

上条「てめえら…くそつたれが…」orz

大和「もうそろそろ帰ろうぜ…明日は始業式だ！」

上条「そうだな…帰るか！」

彼らは自分たちの寮へ帰っていった

上条「たっでーまー」

絹旗「お…お邪魔します」

上条「お！さすがアレイスター行動がはやいぜ！」

上条の目の前にはベッドが二つ置いてあり、片方にはキャリアケースと「柵川中学」の転校許可書が置いてあった。

絹旗「こ、これは…一体…？」

上条「俺が頼んでおいた品だな…お前も学生だろ？なら学校に通わなきゃな」

絹旗「制服まで入ってる…ここまでしてもらって大丈夫なんですか？」

上条「まあ…お前の兄になったわけだし、遠慮すんなって！」

絹旗「超ありがとうございます」

上条「ちなみに初登校は明日だから。先に風呂に入って早く寝たまえ」

絹旗「は…はい！」

そうして絹旗最愛は新しい人生を歩み始めるのであった。
そして、色々な行事がある2学期が始まる!!!

窓の無いビル

??「どうゆうことだ！アレイスター！アイテムを解体するなどッ
！」

アレイ 「今日はお客さんが多いな…君は何が目的だい？」

??「いくら幻想殺しの頼みだからといって簡単に暗部グループを
解散させるなど！」

アレイ 「構わないさ…あれがなくても私のプランに支障はない」

??「俺はお前の考えていることなど分からない…」

アレイ 「普通の人間には理解などできるはずもない」

?? 「お前は一体何が目的なんだ!？」

アレイ 「……………連れて行け」

アレイスターが言葉を言い終えるのと同時に案内人が現れ、訪問者を連れていった

アレイ 「私も上条当麻の生き様を見届けたくてね」ククク

誰も居ないビルの中に不吉な笑い声が響いていた。

8月31日(水) (後書き)

アレイスターを「アレイ」にしたほうが、シリアスムードからすぐに脱出できると思ってアレイさんを にしました

絹旗を妹にした理由は、

?まだ中1で、ずっと暗部にいたらしいから一般人として生きにくいのではないかと上条が考えたから。

?ただ単に作者が一番好きなキャラクターだから

二つ目は理由になっていませんね…

9月01日(木) 朝(前書き)

新学期なので少し気合を入れて書きました。

長文になります申し訳ありません

9月01日(木) 朝

9月01日早朝

上条「んああ？なんだこのいい匂いは？」

絹旗「お兄ちゃん、おはようございます。朝食を作っておきました」

上条「(ああ…そっか俺、妹出来たんだけ) ありがとうな」

絹旗「あまり残ってるものが少なかったので、あまり多く作れてないんです」

上条「いや、問題ないぜ…食べないよりましだからな」ナデナデ

絹旗「んな!…なんなんですか!?!?!」

上条「さあ?なんでしょうか?」ニヤニヤ

絹旗「早く食べましょう!学校に遅れますよ!」

上条「ああ…そうだな(まあ昨日ほどじゃないけど落ち着いてるな…慣れてきてるのか?)」

2人「…いったただつきまーす」

朝食を食べ終えた2人。

学校へ行く準備も終わり、いざ出発!

上条「絹旗は一人でも大丈夫だな?」

絹旗「子供扱いしないでください!あと、私のことは最愛でいいで

す

上条「ああ…わかったよ」

土御門「かゝみやゝんおはようだにゃー」

上条「お前は朝から元気だな…」

土御門「お！その子が噂の居候ちゃんかにゃー？」

絹旗「絹旗最愛です。超よろしくお願いします」

自己紹介を終えた直後彼らも部屋から出てきた

大和「うっす、朝っぱらから元気だな」

一方通行「眠みィ」

上条「居候つぱいけど、戸籍的には俺の妹だな」

土御門「……………ついにかみゃんもこっちの住民だにゃー！」

上条「てめーと一緒にすんじゃないやねえええええええええええ」

大和「早く出発しねーと遅れるぜ??」

土御門「そんなあなたにテレポーター！1時間1500円だにゃー」

大和「俺たちはテレポーターが使えるだけであってな…別にテレポ

(ry)ガミガミ

一方通行「説教始めた大和は置いていくかア」

絹旗「私は超こつちなので、それではまた後で」

大和「頑張つてなー」

上条「いやあさ、一人だけ汗かいてないんだぜ？おかしいだろ」ニ
ヤニヤ

一方通行「手を……話せエエエエエエエエエエエエエエ！！！」

もちろん一方通行の腕力じゃ上条の腕を振りほどける訳がない。
そうこうしているあいだに教室についた上条一行
上条たちが席に座ると同時にチャイムが鳴り、彼らの担任が入って
きた

小萌「HR始めますよー」

上条「先生！始業式は何分ぐらいですか？」

小萌「40分ぐらいですネー」

青ピ「先生！いくらなんでもながすぎちゃいます？」

土御門「あのクソハゲの話が長いだけだにゃー」

小萌「校長先生はたしかにハゲてますが…口にはだしてはいけな

んですよー」

一方通行「ちよっくら昏倒させてくるわア……」

小萌「一方通行ちゃん！それだけはやっちゃんいけないですよー」

そうこうしている間に始業式の5分前になっていた

小萌「みなさーん！早く移動してくださいなのですよー」

>うーい

>今行きまーす

始業式

ハゲ「…であるからして…ここはこうなんですが…」

ハゲ「2学期というのはですね…」

一方通行「うぜエ…黙らせるか」

一方通行が演算を終えるとハゲ校長の方向へ空気の塊が飛んでいった

ハゲ「大覇s…ビブルチツ!…」チーン

教師「」「校長先生!!!」「」

一方通行「決まったぜエ…」

土御門「ナイスだにゃー」b

大和「俺でも出来たけどな」ゲラゲラ

上条「先生たち焦ってるぜ」ククク

そうして始業式は20分前後で終わった。

今、お兄ちゃんたちと離れて柵川中学に向かって歩いていきます
そんな私に突然話しかけて来た人たちがいます…

?? 「見慣れない顔ですね…もしかして転校生とかですか!？」

?? 「佐天さん、そんなわけなんですよ…見たことないんだったら
先輩でしょう」

さてん…と呼ばれた方の人は黒いロングヘアーにお花のヘアピンを

付けている
美人な人で、
もう一人は…花??

佐天「初めまして！柵川1年の佐天涙子って言います。あなたは転校生ですか!？」

絹旗「はい。絹旗最愛っでいいます1年生に転入することになります…」

自分の口調も忘れてしまうほど緊張しています！
助けて!!!

??「佐天さん絹旗さんが驚いてますよ…私は初春飾利といいます。同じく1年です」

初春飾利さんに
佐天涙子さん…

超面白い人達です同じクラスだったら超うれしいのですが…

絹旗「学校に着いたら、校長室に超行かないといけないんです」

佐天「だったら私たちが案内しますよ!」

初春「困っている人を助けるのが風紀委員の仕事です！」エッヘン

やはり超いい人達です！

校長室

校長「君が転入してきた絹旗くんだね？…ほうほうレベル4！？その年で優秀なんだね」

絹旗「お褒めいただき超光栄です！」

校長「君にいいお知らせだよ、さっき君を連れてきた彼女たちとは同じクラスになっているからね」

キタ (。°) ！！

同じクラスです！超嬉しいです！

絹旗「あ、ありがとうございます！」

校長「それでは1日でも早くこの学校に慣れるようにね」

絹旗「はい！……………失礼しました」ボタン

廊下に出ると、佐天さんと初春さんが待ち構えていました

佐天「やったね！絹旗さん！同じクラスだよ！」

初春「これからよろしくお願いしますね」

握手をしていたら女の先生が近づいてきました

佐天「あ…絹旗さん、この人が私たちの担任の山口先生ですよ！」

山口「貴方が絹旗さんね？私は山口美嘉。よろしくね」

目の前に26歳ぐらいの若いグラマーな女性が立っています
私もあそこまで大きくなるんでしょうか…？

初春「山口先生にはお子さんがいるんですよ！」

え…！？この若さで人妻ですか！？超すごいです

佐天「確かお子さんの名前は…拓也でしたっけ？」

山口「その通り、私の息子は山口拓也よ…そんな話はどうでもいいわ！HRが始まるから教室に戻りなさい！」

佐初「はい」

山口「ごめんなさいね…あの2人はいつもあんなだから」ヤレヤレ

絹旗「いえいえ…超いい人達じゃないですか」

山口「私たちも行きましょう?」

絹旗「はい!」

ついにこの教室に入るんですか…超緊張してきました!
でも、なかには佐天さんと初春さんがいるんです!
きつと大丈夫ですよ!

>入ってきてくださいーい

ガラガラ…

絹旗「超失礼します…」

>カワイー

>背低いねー

山口「それでは絹旗さん、自己紹介を」

絹旗「はい……」

私は自己紹介で、自分の能力、兄と呼べる人の存在、兄の周りの愉快な人たちのこと……

みんな真剣に聞いてくれました。

唯一、過去のことは話しませんでした。

絹旗「……………以上です」

山口「はい次は質問タイムですよー」

絹旗「ええ！？聞いてませんよ!」

山口「言ってませんよ?」「ニヤニヤ

えええええあれでも教師なんですよね…
超ひどいです

質問では色々なことを聞かれました
楽しい時間はすぐにすぎるんですね…

山口「始業式が始まるので移動してください」

>はい
>だるいわー

体育館

校長「…であるからにして…できればこうしてほしいのですが…」

絹旗「あの校長ウザイですね…ちょっと昏倒させましょつか？」

初春「!?それだけはやめといたほうがいいですって!」

佐天「そんなことしちゃうと初春に捕まっちゃうぞ」「ニヤニヤ

絹旗「それは超困りますね」

初春「事前に事件発生を止めるのも風紀ジャッジメ」今は私が止めたんだけどなあ…」「ひどいですよ佐天さん…たまにはいい格好させてくださいよ」

ヒソヒソ話をしたらいつのまにか始業式も終わって、超楽な状態になってました。
教室に帰ったら2学期の目標を山口先生が言って、それをみんな受け流してました

山口「もう下校しても大丈夫ですよ」グスッ

初春「今日は風紀委員の仕事があるので!先に帰りますね」

佐天「絹旗さん！私たちも行くつよ！」

絹旗「ごめんなさい…お兄ちゃんたちと超遊ぶ約束があるので…」

佐天「それなら仕方がないね…それじゃ！また明日ね」ノシ

絹旗「超頑張ってくださいねー！！」ノシ

P i r r r r r

お兄ちゃんからメールが届きました。

第6学区のゲーセンに超待ち合わせのようです

いざ第6学区へー！！

学び舎の園

食蜂操祈と白井黒子は2人で歩いていた

食蜂「御坂さんのことはいいの？」

黒子「今日は早めに学校へ行かれたので、わたくしはひとりでしたの」

食蜂「そこで私を見つけて、走ってきたと」

黒子「その通りですの」

??「あら…珍しい組み合わせね」

黒子「綿辺先生！おはようございますの」

食蜂「先生、おはようございます」

綿辺「おはよう……でもどうして寮が違う貴方たちが一緒に登校して
るのかしら？」

黒子「え、そ……それは」チラッ

食蜂「白井さんが寂しくて私に飛びついてきたんですよ」クスクス

黒子「う……黒歴史ですの」

綿辺「大げさね」クスクス

食蜂「そういえば、白井さんに師匠ができたそうじゃないの……」

黒子「やっと聞いてくださいましたの……！」

綿辺「聞いて欲しかったのね」クスクス

黒子「レベル4の空間移動の殿方なのですが…」

食蜂「どんな人なの!？」クワッ

綿辺「がつつきすぎよ…」

黒子「周大和…とい「はあああああ!？」…:…どうかしましたの?」

食蜂（だ…だからあの日あのレストランに白井さんがいたんだわ…大和さんはロリコンだったのですね）

黒子「師匠はわたくしと同じレベルなのですが、能力の強さが圧倒的に違うんですの」

食蜂（そりゃそうよ…大和さんはレベル5ですもの）

黒子「今度、特訓を受けさせてもらえるんですよ」

綿辺「特訓?」

黒子「はい。師匠のお仲間の方と模擬戦をさせてもらえるんですの」

食蜂（え…ちょ…無理ゲーってやつじゃないかしら…）プルプル

黒子「操祈さん？なぜ震えているんですの？」

食蜂「いや、ちょっと面白いことがあってね…思い出して笑ってしまっただの」アセアセ

綿辺「じゃあ私はここで。早く学校に行くのよ？」

黒子「わかりましたの」

そして笑いを堪えながら道を歩いていると、常盤台中学の校門に着いていた

黒子「では、わたくしはここで」

食蜂「ええ…ではまた後日」

黒子「失礼しますの」

そう言つて白井は靴箱へ走つていった
走つて行く白井を見届けたあと、彼女は自分のバッグから携帯を取り出し
今日の予定を確かめていた

食蜂「今日は……………」

そして、自身のクラスへ着いた彼女は携帯をバッグに片付けると簡単に髪を整え
教室に入つていった

クラスメート「……………」おはようございます「……………」

食蜂「皆さんおはようございます。今日もよろしくお願いしますね」

そしてHRも終わり、始業式に向かうお嬢様達
いくらお嬢様学校と言っても校長の話は長いのであった…

校長「であるからですね…今年こそは…」

食蜂（いくらなんでも長すぎではありません？……当麻さんはむやみに能力を使うなど言っていました……約束を破ってごめんなさい！！） キュイーン

校長「ですから……えーっと……ここまでにします」

教頭「校長！？お話の途中ですよ！？」

校長「イエ、ハナシハオワリマシタ」

担任「急遽予定を変更して進みましたが、今日の日程は全て終わりました。安全に考慮して下校するように」

一同「……………失礼します」……………

食蜂「さて…今日はどうしようか」

P i r r r r r r r

食蜂「こんな時間に一体誰なんでしょうか」チラッ

食蜂「当麻さんから！？今すぐお返事を！」パカッ

From当麻さん

よう！当麻の携帯借りてメールしてるぜ！

一瞬当麻かと思っただけ？（笑）

その風景が浮かんできて皆爆笑だぜ？

それと、皆で第6学区のゲーセンで遊ぶ

ことになったんだ。

ミサキチも早く来いよな

By大和

食蜂「遊ばれてますよね？絶対」シクシク

テンションの下がった食蜂だが、ちゃんと待ち合わせ場所に向かうのであった。

9月01日(木) 朝(後書き)

絹旗のキャラが崩壊し始めてます
修正するつもりはありません。

ですが、ブラコンにはしないつもりです

食蜂ってこんな感じでいいんですかね？

9月01日(木) 午後(前書き)

新学期が始まりましたけど、
かわりのない友情を…

9月01日(木)

午後

第6学区ゲームセンター入口

4人の男子高校生と1人の女子中学生はお嬢様が到着するのを待っていた

大和「ミサキチの野郎遅いな」

一方通行「あんなメール送ったから来る気失せたんじゃないのか？」

土御門「でも、ここにはかみちゃんがいるぜよ…100%来ると思うにやー」

絹旗「1つ超気になったんですよ、第5位はお兄ちゃんのこと超好きなんですよね？それでいつもフラれている…なんでお兄ちゃんはその人のこと受け入れてあげないんです？」

上条「たしかに操祈は可愛いし、美人だし、凄い奴だよ…たださ、常盤台は女子校だろ？もし俺がOKでしたらめんどくさいことになるんじゃないかと思ってるわけ」

絹旗「え…それじゃあ卒業したら…？」

上条「さあな…そんなときはそんなときだ」

大和「ん？あの金髪はミサキチじゃねーの？」

上条「だな…お前らは先に中に入っといってくれ」

一方通行「どうかしたのかア？」

上条「妹こいっの存在を伝える。偽りなしで…だ」

土御門「そうゆうことならさきに入っておくぜよ」

土御門、一方通行、大和の3人は先にゲームセンターに入っていた

そして食蜂と合流した上条は絹旗のことを全て話した

食蜂「だいたいのことは理解しました」

上条「よし！それなら店に「ですが！！！！」…何！？」

食蜂「どうして打ち止めちゃんを助けに行くとき私を呼んでくれなかったんですか！？」プンプン

上条「だから、女の子を危険に晒したくなかったんだよ」

食蜂「そんなに…そんなに私は…頼り…ないんですか？」グスッ

上条は絹旗の中に入っとけと伝えたと食蜂と共にどこかへ歩いていった

大和「最愛ちゃん！あいつらはどうしたの？」

絹旗「いえ、研究所突入のお話のとき食蜂さんが「私は頼りないの？」とおっしゃって彼女を超慰めるためにどこかへ連れていったんです」

土御門「なるほど…いつものパターンだにゃー」

大和「だな！…お！このゲーム面白そうじゃねーか！」

そこには能力の強さを測るパンチングマシンが置いてあった
経歴の上位10人の名前が全て同じなのが驚異的だが

一方通行「超電磁砲はこんなとこで何をやってんだア？」

大和「上位10名が全員御坂美琴だぜ？こりゃすげーや」

絹旗「私たちも超やってみましょう！」

土御門「俺はパスだにゃー…無理ゲー全開だにゃー」

大和「っつーわけで俺から…な！」「バシッッ

> テツテレレツテツテー…歴代第1位に認定!

大和「あっははははは1位になっちまったー」

土御門「棒読み全開だにゃー」

絹旗「次は私ですね……超室素パーパーンチ!!!」バコオ!

> テツテレレツテツテー

絹旗「第6位ですか…それでもスコア1位は私の2倍ですか…超勝ち目ないじゃないですか!」ウガ!

一方通行「次は俺かア……………自転エネルギーを集めてエ…力を抑えてエエエ…」ウズウズ

一方通行「今だ!」ドカアアアアアアアア!

> error…………採点不能ノ能力ノタメ自動的ニ第1位ニシマス

一方通行「これが第1位の力だア」

大和「威張ってんじゃねーよ!…一瞬壊れたかとおもったじゃねーか!」ヒヤヒヤ

土御門「お!かみやんの帰還ぜよ」

上条「おーい遅れてごめんな」

大和「別にいいって!それよりもレースのゲームやりにいこうぜ! 4人対戦できるやつがあるらしいから!」

一方通行「別にいいけどよオ…操祈たちはどうするんだ?」

食蜂「私は最愛さんとプリクラを撮りにいくので、後で集合にしましょ」

上条「了解だ!じゃあまた後でな」

食蜂たちは伝えることをしっかりと使えるとプリクラのあるほうへ歩いていった

上条「今回こそは俺が勝たせてもらうぜ？」

大和「フ…トウマよ私についてくれるかな？」

土御門「負けるわけにはいかないんだにゃー」

一方通行「ねみィ…」

> 3 / 2 / 1 / GO!

結果

1位 / 大和

2位 / 一方通行

3位 / 土御門

4位 / 上条

一方通行「相変わらず弱いなあ……」

土御門「あそこでスリップしてたからにやー」

大和「今回も俺の圧勝だな」

上条「orz」

レースは上条の大敗に終わり、レース中に決めた約束によりアリスを奢ることとなってしまった
そこに、プリクラを撮り終えた2人が戻ってくる

食蜂「当麻さん」

上条「お！もう撮り終わったのか？」

絹旗「操祈さんてば顔を超押し付けてくるんですよ！」

食蜂「絹旗さんは照れ屋サンなんですよね」「ツヤツヤ

絹旗「最後に全員で超撮りませんか？」

大和「いいね！行こう行こう！」

上条「美白モードは外さねーと一方通行が消えちまうな」ニヤニヤ

土御門「目だけが残って心靈写真みたいになるにゃー」ニヤニヤ

食蜂「1度消えてしまいましたものね」クスクス

大和「言われない放題の第1位」ニヤニヤ

絹旗「超消えるんですか！？」ビツクリ

一方通行「orz」

そんな話をしている時、偶然ゲームセンターの中に設置してあったテレビ画面には
とんでもないニュースが流れていた。

上条「第22学区でテロ…?」

大和「おいおい…なんだあの巨人みたいなやつ」

食蜂「一体誰があんなことを…?」

土御門「一体何が起こってるんだにゃー…(このゴーレムは…クソつたれが!!!)」

一方通行「生徒は避難しろ…だとよ」

大和「俺たちも助太刀に行こうぜ!」

食蜂「いえ、止めたほうがよさそうですよ」

一方通行「行っても警備員にとっ捕まえられるのがオチだからなア…」

土御門「今のうちに帰ったほうがよさそうだしな」

絹旗「ではプリクラは超今度ですね」

上条「じゃあ俺の部屋で遊ぶか」

食蜂「是非！是非そうしましょう！」キラキラ

大和「じゃあ急いで帰ろうぜ！」

そして第6学区のゲームセンターを後にした一行は急いで寮へ帰るのであった。

途中で土御門がコンビニに寄ったが帰っていいと言われたので4人で帰ることになった

家

上条「ただいまンスー」

絹旗「ただいま戻りました」

食蜂「お邪魔します」ドキドキ

一大「おじゃまするぜ(エ)」「」

大和「操祈は未だに緊張してんのかよ…何回も来たことあるだろ」
ヒソヒソ

食蜂「それでも緊張してしまうものなんですよ？」ヒソヒソ

>いつまで玄関にいるつもりだー？

食蜂「い…今行きます！」

大和「はいはい、ちょっと待ってね」

そして上条のベッドに男たちが、絹旗のベッドに女たちが座った

上条「トランプでもやるか?」「シャツシャツ

一方通行「ダウト」

大和「賛成!」

上条「じゃあ決まりだな……配るぜ?」

>ダウト!

>クソウ…

>超ダウト!

>不幸だ…

>ダウト!

>ふん…だからてめエは三下なんだよ

トランプに熱中してしまった上条一同。

ダウト 大富豪 7並べ ババ抜き…
どの種目でも一方通行が1位であることにかわりはなかった

大和「おいおいもうこんな時間だぜ」

時計>17:54分ダヨ

上条「もうそろそろお開きだな！みんなお疲れ」

大和「まさかこんなにトランプが楽しいとはな…」

一方通行「負けた回数が右手で数えられるンだけどさア…お前ら弱すぎ」

食蜂「一方通行さんが強いだけですよ！」

絹旗「セコイです…超セコイです！」

上条「操祈はもうそろそろ帰らないといけないな…ちょっと送ってくる」

一方通行「間違えても、学び舎の園には入るんじゃないぞ？」

大和「過ちは…繰り返させない！」ウガー

上条「意味わかんねーこと言ってんじゃないよ！……んじゃ行ってくるわ」

食蜂「それじゃおやすみなさい」ボタン

一方通行「行ったか…」

大和「行ったな」

一方通行「絹旗…ひとつだけ聞かせる……表今と昔、裏どっちの生活が好きだ？」

絹旗「今と昔ですか……超愚問ですね、今の生活がいいに決まっているじゃないですか！」

大和「兄があいつでもか？」

絹旗「はい。お兄ちゃんがなぜ私を妹にしたかは超教えてもらったので…」

一方通行「そオカよ…ならいいんだ」

大和「もし…もしもだ、操祈とあいつが付き合った場合お前は どうするんだ？」

絹旗「私はブラコンではないので、超関係のないことです…でも、いつまでも頼りになるお兄ちゃんできて欲しいとは思ってますが」

一方通行「当麻はずっと頼りになるやつだ…頼りにしていいと思うぜ？」

絹旗「はい！超わかりました！」

> たっでーまー

大和「早いな…空間移動テレポートしたな？」

上条「外は危ないかもしれないから…腹減ったけど」

一方通行「ンじゃ、俺たちは帰るからな」

大和「おっじゃましましたー」

2人は帰っていった

部屋に静寂が戻ってくる

上条「静かになったな」

絹旗「そうですね……」

上条「じゃー飯でも食って、早めに寝ますか！」

9月01日(木) 午後(後書き)

食蜂と絹旗の話し方がちょっと違う気がします。
キャラ崩壊してますね

絹旗がパンチングマシンで6位に入れたのは、能力プラス破壊力で入ったと思ってください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1346ba/>

とある仲良しの日常

2012年1月6日17時45分発行